

「未知なる世界へ」

函館中部高校 普通科 2年

菅原留奈

修学旅行で初めて東京を訪れ、私の住む町とあまりにも異なるライフスタイルに驚愕した。登下校中にすれ違う人が少なくのんびりした雰囲気私の住む町とは違い、ぎゅうぎゅう詰めの電車に乗る人々や多様な言語や行きかう人の多さに驚いた。さらに時間の流れがとても速く感じた。刻一刻と時間が変わりあつという間に1日が過ぎた事が印象的だった。そのような東京は、せわしなく少し慣れない所であると感じた。一方で、私の住む町とは違い外国人の多さに驚き、異国に来た感じがして胸が高鳴った。グローバル化が進む今、世界中からモノや人が往来し、日本に多くの外国人が訪れ、そこに新しい環境が生まれる。2020年には東京オリンピックが開催される。世界各国から選手やメディア、そして応援のためにおよそ4000万人の人々が来ることが予測されている。近年、函館にも多くの外国人を受け入れる大学があり留学生が増え、日常的に外国人と触れ合う機会が増えつつある。町はもちろん学校にもグローバル化が進んできている現状だ。50年後にはAIの発展に伴い今ある職業の半分が無くなるといわれている。その時「想像力」と「コミュニケーション能力」がとても重要になる。これからもっと発展するこのような世の中で私たちは共に生きていかなければいけない。

私が海外に興味を持つようになったのは両親の影響がある。幼い頃から海外の生活について聞くうちに憧ればかりが大きく膨らみ海外のテレビドラマを欠かさず観るようになっていた。幼いながらに英語を話す人がかっこよく見えていた。高校入学時にESSという英語の部活に入った。入部した当時は自分の英語の出来なさに失望した。しかし、初めて出場したグループでのプレゼンテーション大会で、英語が相手に伝わり理解してもらえる喜びやうれしさ、相手の内容が聞き取れることの面白さを知った。同時に英語で相手に伝える難しさや質問に即座に答えられない悔しさも知った。それは語学力の問題だけでなく、今までの経験の厚みが足りないからだと確信した。1年間の部活動を経験し、今年は一りで行うスピーチコンテストに出場した。「Warm Hands to Invisible Disability」という題名で出場した。その内容は2つである。私は側彎症という脊柱が左右に曲がってしまう病気を持っている。治療のため首から腰までのコルセットを着用している。床に落ちたペンひとつ拾えない。そんな時、友達がいつもさりげなく拾ってくれる。そのさりげない行動に感謝しているという内容。もう1つは、日本で話題となっているLGBTの人達についても触れ、お互いを認め多文化社会を理解することの重要性を伝えた。この2つの共通点は障害や差別、偏見ではなく、共に認め合い理解していく重要性和、それを自ら言葉に出し行動していくことの大切さを伝えたものである。この内容は以前から自分の中で考えていたテーマで、今回このプログラムに応募したきっかけでもあった。アメリカは多文化社会である。そういう社会で実際に現地の方々と話しをして刺激を受けることで自分の考えが深まり、最終的には

発想し発信する力につながるのではないかと考えている。多くの人種が住むアメリカだからこそ多文化社会を経験する最も良いチャンスだと思う。今の私が、宗教や文化、価値観の違う国で生活するのは難しい事だろう。しかしそれらを避けるのではなく、その人や国を理解し尊重して一緒に生きていける、そんな人間に私はなりたい。

「物事を考える時は広い視野で考えなさい。」

幼少期の頃から両親にこんなことを言われてきたことをふと思い出した。広い視野とはどういう意味なのか。その視点から物事を考えるということはどういうことなのか。

実際にアメリカへ行って多文化社会の中で生活するとはどういうことなのか、日本がより良い国になるためにアメリカでは何がされているのか、ホストファミリーや現地の方とたくさん話をし、日本とアメリカの良いところを交流し刺激され影響を受けたい。そこからヒントをもらい、より良い日本の発展に貢献したい。それが叶えられた時に「物事を考える時は広い視野で考えなさい。」という両親の言葉の意味がわかるだろう。

このプログラムに参加することによって、友達や両親から離れた環境の中で今の自分がどこまで通用するのか挑戦し、日本人の代表として気持ちを伝えられること、悩んでいる人に温かい手を差し伸べたり周囲の人を笑顔にさせたり、一緒にいて心地よい気分させることが出来れば嬉しい。そしてアメリカで得た新たな経験と視点を生かし、人として語れることを増やすと共に、私を通じて友達や周囲の人がアメリカの事を知ることが出来ればさらにいいと思う。この強い思いを胸に未知なるアメリカ・ロサンゼルスに踏み出したい。